愛子の
風俗まんだら

佐藤 愛子

愛子の
風俗まんだら

佐藤 愛子

朝日新聞社

愛子の風俗まんだら

定価　550円

昭和47年8月25日第1刷発行

著　者　佐藤愛子

発行者　朝日新聞社　角田秀雄

印刷所　大日本印刷株式会社

発行所　東京・名古屋 大阪・北九州　朝日新聞社

© 1972年　佐藤愛子

0095-254023-0042

目

次

ホストクラブでお尻をつねられた私 5
ああ無念！　レスビアンバーで冷たくされた私 19
女だてらにストリップを拝見した私 33
男女交際の会でハッパをかけたくなった私 47
女子プロレスに思わず腕をなでさすった私 61
ゴーゴークラブで若者と無理しなかった私 75
ゲイバーでふっと熊など思い出した浮かない私 89
〝ワンワン天国〟にかみつきたくなった私 103
もう都会はいやよ、北海道の輓曳競馬で生返った私 117
けったいな芝居に口をアングラアングリの私 131
高校野球を見て女学生時代に戻った私 145
男のファッションショウを見て腰巻スタイルを提唱した私 157

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

速成宴会舞踊教室でサラリーマンに涙した私 169
おおプラハ城は盛り沢山よく食べたものだ、と歌った私 185
青森のババア宿に嫁コの悪口を聞きに行った私 197
占いで「佐藤も愛子も悪い」と、改名をすすめられた私 213
津軽のイタコが呼出した父になにやら悲しくなった私 227
サドマゾ・バーで犬男に脚をなめさせた私 241
乳房に彫られた緋牡丹に思わずうなった私 255
夫婦和合の観音さまを見て性教育の普及に感心した私 269
花嫁の群像にサーカスの練習場を連想した私 281

装幀・挿画＝かも　よしひさ

本書は「週刊朝日」に昭和四十四年九月十九日号から四十六年十二月十日号まで連載されたものを収録

ホストクラブでお尻をつねられた私

大正十二年生れである私は、幼時より女は男にかしずくもの、男は女を従え服させるものと教えられて育ってきた。なぜ女は男にかしずかねばならぬか？　それは男は偉いからであり、女はアホであるからだと、答えは、すこぶる明快だった。それではなぜ男は偉いのか、というと、ヒゲが生えるから、と答えた友だちがいた。小学校二年くらいのときである。しかし、なぜヒゲが生えると偉いのか？　とは私たちは思わなかった。校長先生、お医者さん、警察署長、陸軍大将……偉い人はみなヒゲを生やしていたからだ。もちろん、女にはだれひとりヒゲはない。

——なるほど、女はアカンのやな。

と、おさな心にうなずいたものである。

それより三十有余年の歳月が流れ、その間に戦争に負けるという大混乱があり、男はヒゲを立てなくなった結果、次第に女に一歩を譲り二歩譲り、女に服し、女にたより、女に叱られ、女を怖れ、最近ではついには女にかしずくことを商売とする一群の男性が登場するにいたった。その男性の群れ集るところをホストクラブと称し、ミメ麗(うるわ)しき若者が女客と酒くみかわ

し、ダンスの相手をして一カ月二十万も三十万もの収入をあげるのだという。

某月某日、私はそのホストクラブなる店に足を踏入れた。都内のホストクラブの中でも上客が集るというクラブTである。男が女にどんなふうにかしずくのか、女が男にかしずく様ばかり見てきた私には、快哉を叫ぶというところまではゆかぬまでも、ついにここまできたか、という無量の感慨がある。男に酒をつがせ、オベンチャラをいわせてチップをやる！　これぞ男性に虐げられてきた日本女性の、長い歴史の中の真夏の夜の夢ではなかったか！

ホストクラブは現在都内に七カ所もあり、ホスト志願者は引きもきらぬという。女にかしずくのはそんなに楽しい仕事なのか、ボロい仕事なのか。どうせホストクラブへ行くような女客は、男にモテぬから行くのであって（何を隠そう私もその一人）、従って、すこぶるつきの美人とか、魅力ざかりの若い娘さんは皆無といってもよろしいであろう。そんなモテぬ女にムリしてオベンチャラを使うのはさぞかし苦労多いことだと思うのだが、そう思うのは早計で、もしかしたらモテぬ女の集合であるからこそオベンチャラのきき目も強いのかもしれない。（クスリをつけたことのないヤバン人は、傷に歯ミガキ粉をなすりつけただけでなおるということがある）

そう思いつつ、ひとわたりテーブルを見渡したが、あたりの照明は冬の暮れがたのように暗

くて人の顔もさだかに見えぬ。このクラブはカネモチ客が多いといわれているが、経済的に余裕があるということは、つまり中年になっているということで、この照明もシワかくしに役立つべく暗くしてあるという寸法なのかもしれぬ。

ここでは二人、三人とつれだって来ている客より、一人客の方が多い。ダークスーツのホストの腕が右側から客の背中に回っているシルエット。これはシルエットだからまあまあ見ていられるのであって、明るければどんなことになりますかな。

大体においてどこのホストクラブへ行っても、客の方は楽しそうでホストの方は憮然とした表情が多いのは、何となくいたましいような、しっかりしろ、といいたいような、ザマアミロといいたいような複雑な気持である。男の誇りを捨てたつもりが、まだどこかに残っていたとでもいうのだろうか。ことにチークダンスをしているホストの顔は憮然たるあり、沈痛なるあり、黙念たるあり、棒グイのようなのあり、キョロキョロと目玉を動かして、他のお客を物色しているのあり、千差万別の中に、生きることの切実さをそれぞれに物語っているかのようである。

中には踊ることそれ自体、楽しくてしかたがない、という風に躍っているホストもいること

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

はいるが、そういうホストはあまり若くもなく、二枚目でもない。バアさん芸者が座モチがうまいのと同様であろうか。しかし、それにしても、日本の二枚目というものは、すますとなぜあんなに棒グイ風になるのだろう。

ところでお客の方は平均年齢三十五、六歳というところだろうか。水商売風あり、女実業家風あり、デザイナー風、美容師風、有閑マダム風、いろいろだが、しかし、この××風というやつ、近頃はあんまり信用出来ない。水商売の人かと思ったら〝社長夫人〟だったり、有閑マダムかと思えば女医さんだったりという具合で、早い話がこの私などもホストたちにはいったい何者なのか見当もつかぬらしく、女社長といっても、作家といっても主婦といっても信用はしてもらえなかったのである。つまり金にも知性にも、また堅実、常識にも縁遠い雰囲気なのであるらしい。これはホストの罪ではなく、当方の罪だ。

そこで相手は当方が何者ともわからぬままに、あてずっぽうにゴマをすることになる。女にゴマをするのは着ているものや装身具をほめるのが最も手近な方法だが、何分にも貧乏のどん底にあえぐ私は、指輪、アクセサリーのたぐいは何も身につけていない。同行のM女史は、胸のブローチをさかんにほめられているが、私にはほめるべき手がかりが何もないのである。そ

こで知恵を絞った若きホスト氏は、こういった。
「あなた、十年前は鳴らしたでしょう」
十年前とは何ごとか、十年前とは。同じゴマをするなら、もっと上等のゴマをすったらどうだ。そのうちにそのホスト君、ゴマをする代りにやたらに抓りはじめた。
私いわく「ナンバーワンって人は、どんな人がなるの？　指名客の多い人？」
「いいえ、そういうことばかりじゃないんです。それもあるけど月々のお客さまのお勘定のね……その、総額がね……」
「つまり客の数は少なくても、フンダくったカネの額できまるってわけ？」
「わっ、悪い表現ね」キュッ――つまりここで抓るというわけだ。
「ねえ、電話番号、教えて下さいよ」
「電話番号？　なんだってそんなもの教えなきゃなんないのよ？」
「教えなきゃなんないってことないけど（キュッ）かけてもいいでしょう？」
「そりゃあなたの自由だけど、でも何の用事？」
「用事だなんて（キュッ）声が聞きたいの」

「痛いわね、そう抓らないでよ、肉のたるみ具合を検査してるの？」
「ハハハ、面白いかたね」と今度はたたく。どっちが面白い人だか。
「ねえ、何時ごろ、電話すればいいですか」
「何時ごろって、そうね、ラジオで早起きドリってのをやってるね。そのころがいい」
「早起きドリ？」
「朝の五時半よ」
「わァ、イジワルしてるんですね（キュッ）」
つまりこのキュッがゴマすり代りというわけなのであろう。
かと思うと、やたらに踊ろうというホストがいる。しゃべるよりも踊る方がラクだというわけなのか。こういうのはするべきゴマを捜すだけの労力を惜しんでいる怠け者と知るべし。踊ろう踊ろうというわりに、人の足を踏んでばかりいる。
さる二十歳のホスト、白いやわらかそうな顔。踊りながら耳もとで、
「ねえ、お名前だけでも教えて」
「名前？　そんなもの聞いてどうするの？」

「どうするってことはないけど、ただ聞きたいの」
「あとで亭主に脅迫状でも出す気かネ？」
「またすぐそういうことを……ぼくは真剣ですよ、ホント、一生懸命だ」
「じゃ、教えてあげる」
と、おふくろの名前を教えた。
「まり子さんっての、可愛い名前ね」
「可愛いでしょ、エヘヘ」
七十六歳のまり子さんだ。
「お電話していい？」（ああ、ホストは皆どうしてこう電話をかけたがるのか。へたなテッポも数撃ち
ゃ当る、か）
「いいですよ。いつでも暇だから」
うちのおふくろは毎日退屈しているくせに、電話がかかると、「うるさいねッ」と怒る性分だ。
しばらくホスト君は黙って踊る。と、突如として歌い出した。

〈背のびして見る海峡を
今日も汽笛が遠ざかる
……
「ぼく、『港町ブルース』って大好き」
「へええ、そう」
大好きはいいが、なにも踊りながら歌わなくてもいいではないか。ここは宝塚の舞台じゃないんだ。
「まり子さんはどんな歌が好き？」
「そうねえ。流行歌はあまり好きじゃない」
「じゃ、ポピュラーなんか？」
「ン、まあ、そうね」
「高級なんですねえ……」
ポピュラーが高級とは今の今まで知らなんだ。これで月に二十万も三十万も稼げるとあっては全くボロい商売だ。

踊り終ってテーブルへもどると、おしぼりを広げて渡してくれる。料理がくると箸を割り、小皿に調味料を入れて、食べればいいようにしてくれる。サラミソーセージの皮はむいてくれる。

大正生れの亭主関白にコキ使われてきた四十女にしてみれば、何しろ生れてはじめての体験である。それが職業用のものとわかっていても、急に公爵夫人の気分になるのである。その公爵夫人の気分を最後まで全うさせんものと、勘定書を持ってくるときは、床のカーペットに膝をつき、あたかも姫君に花を捧げる騎士のごとくにうやうやしくさし出すのであるが、そうやうやしくされても、平気でツリ銭の十円玉までハンドバッグの中にさらい込んだのは私ぐらいなものだろう。たいていは公爵夫人にふさわしく、おうようにチップをはずむらしいが、その額は一説には平均五千円ともいわれ、また二千円ともいわれ、また三万円もらったホストもいるという。こういうチップは別として、勘定は、私の経験では、だいたい二人づれで行き、二杯ずつ洋酒を飲んで一品か二品の料理を取った場合、一万五千円から二万円であった。

「ご婦人だっていろいろ、ご家庭でのストレスがあるでしょ。それをここでパーッと解消していただいて、明日からまた気持よく生活していただく——家庭円満、健康増進の秘訣じゃあり

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com